

## チャック語の「いく」*laŋ*と「くる」*vaiŋ*

藤原 敬介

京都大学研修員

**【要旨】** 本稿では、バングラデシュ人民共和国・チッタゴン丘陵ではなされるチャック語（チベット・ビルマ語派ルイ語群）において「いく」を意味する動詞 *laŋ* と、「くる」を意味する動詞 *vaiŋ* について、語構成を分析した。その結果、共時的にも通時的にも、「いく」*laŋ* は *la* + *-aŋ*、「くる」*vaiŋ* は *va* + *-aiŋ* と分析できることがわかった。*la* は動詞としては「とる」、助動詞としては「いく」という意味であり、*-aŋ* は本来的には去辞につじると推定される助動詞である。*va* は「くる」という意味の助動詞としてのみもちいられ、*-aiŋ* は来辞を意味する助動詞である。

チャック語において移動にかかわる代表的な助動詞である *-a* (去辞)、*-aiŋ* (来辞)、そして *-aŋ* は、チベット・ビルマ諸語において人称をしめす接辞である \**a* (三人称)、\**n* (二人称)、\**ŋ* (一人称) と、それぞれ関係している可能性がある。そうであるとすれば、人称標示が移動表現のなかに残存する言語として、チャック語を位置づけることができる\*。

**キーワード：**チベット・ビルマ諸語、移動動詞、人称接辞、内的再建、比較言語学

### 1. はじめに

チベット・ビルマ諸語において「いく」と「くる」をあらわす形式は、言語によってさまざまである。たとえば、チベット・ビルマ諸語における動詞の人称標示と移動動詞をあつかった DeLancey (1980) は、チベット・ビルマ祖語（以下 PTB と略す）において「いく」と「くる」をあらわす形式として、表 1 にあげる七種類の語根を再構している。いずれの語根にたいしても、「いく」という意味を反映している言語もあれば、「くる」という意味を反映している言語も確認されている。チベット・ビルマ諸語の歴史言語学をあつかう Matisoff (2003) では、対応する形式について「いく」(g) または「くる」(c) のみの語積がついているものがおおい。

\* 本稿は、第 39 回国際漢藏語学会（シアトル・ワシントン大学、2006 年 9 月）での発表 “Come and Go in Cak”，および京都大学大学院文学研究科に提出した博士学位論文「チャック語の記述言語学的研究」（2008 年 3 月）の一部に加筆・修正したものである。本稿であつかうチャック語は、バングラデシュ人民共和国・チッタゴン丘陵・バンドルバン県のオン・トワイン・ギョー・チャックさん（1979 年生・男性）に、2000 年から 2008 年にかけておしえていただいたものが中心である。『言語研究』のおふたりの査読者からは、重要な指摘を多数いただいた。ここにあらためてお礼もうしあげたい。

表1 チベット・ビルマ祖語の「いく」と「くる」

DeLancey (1980)	*ra/la	*wa	*ga	*wang	*pa (i) ~ ba (i)	*ta	*di
Matisoff (2003)	*la-y (c)	*s-wa (g)	*m/s-ka-y (g)	*hwaŋ (c)	*pay (c/g)	—	—

本稿であつかうチャック語 (Cak)<sup>1</sup>の「いく」laŋと「くる」vaɪŋは、先行研究においては表2のように記録されている<sup>2</sup>。

表2 チャック語の「いく」と「くる」

	LGL(1964)	LB(1966)	GHL(1985)	TSK(1988)	M(2007)
いく	laŋ(101:7-7)	laŋ(254)	lã <sup>3</sup> (vol. II, K: 114)	ˈlɔ̃(附録:23-1) <sup>3</sup>	laŋ(附録A #172)
くる	vaɪŋ(96:2-4)	veŋ(255)	vã <sup>3</sup> (vol. II, K: 115)	ˈvai(附録:23-2)	vaɪŋ(附録A #173)

論者によって表記にちがいはあるけれども、どの記述においてもほぼおなじ形式が記録されている。表1にあげたチベット・ビルマ祖語と比較すると、チャック語の「いく」laŋはPTB \*ra/\*la-yに対応し、「くる」vaɪŋはPTB \*wa/\*s-waに対応しているようにみえる<sup>4</sup>。しかし、「いく」でも「くる」でも語末に鼻音-ŋがあらわれている点が特異である。

先行研究では語形があげられるにとどまるチャック語の「いく」laŋと「くる」vaɪŋについて、本稿ではチャック語内部の証拠による共時的観点ならびにチベット・ビルマ諸語を視野にいられた通時的観点から分析する。そして、「いく」laŋと「くる」

<sup>1</sup> チャック語はバングラデシュ人民共和国・チッタゴン丘陵でチャック人によってはなされている言語である。系統的にはチベット・ビルマ語派のうちルイ語群に属する。チャック人はほとんどが仏教徒である。Gordon (2005: 321) によれば、バングラデシュにおけるチャック人の人口は5500人である。チャック語はサック語 (Sak) とよばれることもある。チャック語というよびかたは、チャック人の自称である [átsaʔ] がバングラ語風になまった名称 [tʃak] に由来する。サック語というよびかたは、ビルマ語アラカン方言やビルマ文語を反映した名称であるとともに、「12世紀のビルマ語碑文の *sak* に比定される」(藪 1989) 名称である。本稿では、自称によりちかいかいチャック語という名称を採用している。

チャック語の音素は /p, ph [pʰ], b, t, th [tʰ], d, c [ts], ch [tʃ], j [dʒ], k, kh [kʰ], g, ʔ (音節末子音としてのみ), ʃ, ʄ, v, s, f, h, m, n, ŋ, l, r, w, y; i, e, a, o, u, i, u, ə/ である。二重母音は閉音節でしかあらわれず、/-aiʔ, -ain/ があるのみである。声調には低調 (無標) と高調 (有標: 鋭アクセントでしめす) の二種類がある。音節構造は [σ= 頭子音 + 介子音 + 主母音 + 末子音 / 声調] で構成される。文法的小辭はさまざまな連声をこうむることがおおい。たとえば、先行する音声の有声性に依存して頭子音が有声交替をしめしたり、母音の音色に依存してわたり音があらわれたり、声調にしたがって変調をおこしたりするものがある。このような小辭について本文で言及するばあい、代表的な形式をもちいる。

本稿でもちいる記号・略号については本稿末尾の**記号・略号一覧**を参照。

<sup>2</sup> 表中の略号は以下のとおり: LGL (1964) = Löffler (1964), LB (1966) = Bernot (1966), GHL (1985) = Luce (1985), TSK (1988) = Thun Shwe Khaing (1988), M (2007) = Maggard et al. (2007)。

<sup>3</sup> ˈlɔ̃ という語形は附録にのみみられる。本文中の例文にあがっているビルマ文字表記から推定される音価は lã である。

<sup>4</sup> チャック語の「くる」vaɪŋはPTB \*wangに対応しているようにみえるかもしれない。しかし音対応から判断して、その可能性はない。くわしくは4.3で後述する。

vaij がチベット・ビルマ祖語とどのような関係にあるかを考察する。

## 2. チャック語文法の基本

チャック語の「いく」lanj と「くる」vaij について具体的な分析をおこなうまえに、チャック語文法の基本的な部分について、簡単にのべておく。

チャック語の基本語順は SOV で、ほとんどすべての従属要素が主要部に先行する。基本語類としては名詞、動詞、副詞、小辞がみとめられる。「形容詞」的な語は、形態統語的特徴に応じて名詞または動詞の下位類と位置づけられる。チャック語は膠着性がたかい言語であり、動詞にはさまざまな助動詞が、名詞には各種の小辞や後置詞が付加する。

本稿では、助動詞と述部標識が問題となるので、とくにこの両者のちがいについて、のべておく。

チャック語における助動詞とは、動詞を修飾する小辞の一種である。助動詞は、動詞に直接付加してさまざまなアスペクトやモーダルにかかわる意味をあたえる。ただし、命令文のばあいをのぞいては、動詞に助動詞がついただけでは、文を終止させることができない。

チャック語において文を終止させるために必要な標識を、本稿では述部標識とよぶ。述部標識には、名詞に後続する名詞述部標識、動詞に後続する動詞述部標識のふたつがある。名詞述部標識は、状態述部標識ということもできる。本稿でとくに話題となるのは動詞述部標識である。

動詞述部標識には、文の種類に応じて命令文標識（代表的には -ánj）、完了文標識（-nájj）、未来文標識（=gá/ká）、動態述部標識（=heʔ）などがある。いずれも動詞や助動詞のあとにあらわれる。命令文については、3.3 で後述するように、移動にかかわる助動詞がつけば文を終止させることができる。だから、移動にかかわる助動詞と命令文標識の区別はつきにくいとおもわれるかもしれない。しかし助動詞は、移動にかかわるかいなかをとわず、原則としてはほかの動詞述部標識と共起することができる。これにたいして、命令文標識は、命令文標識以外の動詞述部標識と共起することはできない。

以上のべてきたところを一般的な助動詞ならびに述部標識で例示すると、(1) のようになる。(1a) は、主語 (áma) と動詞 (pí) があるのみで述部標識がないので非文である。(1b) のように、述部標識 (=heʔ) をつければ非文とはならない。(1c) のように助動詞 (-bí) をつけても、述部標識がないかぎり非文である。(1d) のように、助動詞のあとに述部標識があれば非文とはならない。

- (1) a. #áma<sup>5</sup> pí  
3.sg 置く

<sup>5</sup> 語末の -a は、語境界では弱化して [ə] で発音される傾向にある。しかし、本稿では原則としては -ə とは表記せずに、基本形のまま -a と表記しておく。

- b. áma pí =he?  
3.sg 置く =DPRD  
「彼/彼女は置いた。」
- c. #áma pí -bí.  
3.sg 置く -再度
- d. áma pí -bí =he?  
3.sg 置く -再度 =DPRD  
「彼/彼女はまた置いた。」

### 3. 共時的分析

#### 3.1. 「いく」 laŋ と「くる」 vaiŋ の基本的な用法

チャック語の「いく」 laŋ や「くる」 vaiŋ は、(2) にしめすように、「よむ」 phai? に代表されるような通常の動詞と、おなじ統語的環境にあらわれうる<sup>6</sup>。

- (2) a. ŋa laŋ =gá.  
1.SG GO =FUT<sup>7</sup>  
「わたしはいく。」
- b. ŋa vaiŋ =gá.  
1.SG COME =FUT  
「わたしはくる。」
- c. ŋa phai? =ká.  
1.SG 読む =FUT  
「わたしはよむ。」

しかし、「いく」 laŋ と「くる」 vaiŋ だけが、ほかの動詞とはことなるふるまいをしめすばあいが大別して二種類ある。ひとつは完了文におけるふるまいであり、もうひとつは命令文におけるふるまいである。

(3a, b) にしめすように、「いく」 laŋ と「くる」 vaiŋ はそのまま完了文の標識 -náŋj につくことができる。しかし、ほかの動詞のばあいには、-náŋj の前になんらかの助動詞をいれる必要があり (3c)、いれなければ非文となる (3d)。

- (3) a. áma laŋ -náŋj.  
3.SG GO -PPRD  
「彼/彼女はすでにいった。」

<sup>6</sup> 以下、本稿では「いく」 laŋ に GO, 「くる」 vaiŋ に COME と語積をつける。ほかの単語については、一部の機能語をのぞき、日本語で語積をつける。

<sup>7</sup> 未来をあらわす述部標識である =gá/ká は、本来的には名詞化をあらわす =gá/ká とおなじものであるとかがえられる。

- b. áma vaiŋ -náin.  
 3.SG COME -PPRD  
 「彼/彼女はすでに来た。」
- c. áma phai? -aŋ -náin.  
 3.SG 読む -XAN -PPRD  
 「彼/彼女はすでによんだ。」
- d. #áma phai? -náin.  
 3.SG 読む -PPRD

同様に、(4a, b) にしめすように、「いく」 laŋ と「くる」 vaiŋ はそのまま命令文として機能する。しかし、(4c) にしめすように、ほかの動詞では、命令文であることをしめすために、なんらかの標識をつけることが普通である。

- (4) a. laŋ!  
 GO  
 「いきなさい！」
- b. vaiŋ!  
 COME  
 「きなさい！」
- c. phai? -áŋ!<sup>8</sup>  
 読む -IMP  
 「よみなさい！」

以下、チャック語における完了文と命令文について、より具体的に分析し、「いく」 laŋ と「くる」 vaiŋ との関連をみる。

### 3.2. 完了文における助動詞の分布

(3) で概略をしめしたように、チャック語の完了文においては完了文の標識である -náin のまえになんらかの助動詞が必要である。しかし「いく」 laŋ と「くる」 vaiŋ については、必要がない。具体的な用例を (5) と (6) にしめす。

- (5) kíŋ =ya **laŋ -náin** =gá =me ri =gá.  
 家 =LOC GO -PPRD =NOM =EMPH COP =NOM  
 「すでに家にかえったにちがいない。」

<sup>8</sup> 作例をすれば、命令文であることをしめす標識のひとつである -áŋ をつけずに、単独で phai?! といって命令文にすることもできる。しかし、実際の会話や民話にそのような形式があらわれることはまれである。筆者が収集した 60 編、5000 文ほどの資料のなかで、動詞がそのまま命令文としてもちいられる例は数例のみであり、そのうちのおおくは「いく」 laŋ または「くる」 vaiŋ であった。

- (6) avá, ŋa vaiŋ -náij.  
 父 1.SG COME -PPRD  
 「父さん、ぼくがきたよ。」

それでは、「いく」lanと「くる」vaiŋ以外の動詞では、具体的にはどのような助動詞が-náijのまえに必要なだろうか。

(7) にしめすように、-náijのまえにくるものは、ひろい意味で移動にかかわるような助動詞である。すなわち、主語が直示の中心 (deictic center) からはなれることをしめす去辞 (andative) の -a<sup>9</sup> (7a), 主語が直示の中心へむかうことをしめす来辞 (venitive) の -aiŋ<sup>10</sup> (7b), 移動に無関係の -aŋ<sup>11</sup> である (7c)。

- (7) a. áma phai? -a -náij.  
 3.SG 読む -ANDT -PPRD  
 「彼/彼女はもう行ってよんでしまった。」
- b. áma phai? -aiŋ -náij.  
 3.SG 読む -BEN.VEN -PPRD  
 「彼/彼女はもうよみにきた (よみはじめた)。」
- c. áma phai? -aŋ -náij.  
 3.SG 読む -XAN -PPRD  
 「彼/彼女はもうよんでしまった。」

移動にかかわる助動詞のなかには、動詞としての用法をもつものや、動詞にかか

<sup>9</sup> 去辞としての -a と形式的にはまったくおなじものに、場所格・方向格をあらわす =a がある。=a は移動動詞の着点をあらわすためにもちいられることから判断して、去辞の -a ともかわりがあるかもしれない。チャック語の周辺ではなされるインド・アリア系のチャクマ語においては、方向格が名詞のみならず動詞に後続する用法もある。ただし、チャック語とおなじくルイ語群に属するカドゥー語においては、去辞がチャック語と類似した連声をともなう -a である一方で、場所格は =be/pe、方向格は =ba/pa である。チャック語の場所格がカドゥー語の方向格と関係しているとするなら、去辞とは来源がことなる可能性もある。

<sup>10</sup> 来辞をあらわす助動詞としては、(11) でしめす -va もある。-va が物理的な移動をともなうのたいし、-aiŋ のほうには物理的な移動をともなう用例がほとんど確認されず、話し手自身や話題の中心人物にとっての利害にかかわる用法が中心である。そこで、語釈としては -BEN.VEN としている。なお、聞き手にとっての利害にかかわる用法は、ほとんど確認されない。

<sup>11</sup> -aŋ は、完了文であることをあらわす -náij とともにしかもちいられない。また、-aŋ は去辞の -a や来辞の -aiŋ と共起することもない。-aŋ は、動詞に去辞や来辞といった特定の意味をもった助動詞をつけることが適当ではないばあいに、完了文であることを明示するために、うめくさ的にもちいられていると解釈することもできる。-náij と共起する助動詞は、後述していくように、移動やアスペクトにかかわる。だから、-aŋ も移動やアスペクトとかかわりがあると推定される。ただし、その具体的な意味はあきらかではない。本稿では「移動に無関係」という記述をするにとどめる。なお、-aŋ と形式をおなじくするものに、目的格をあらわす =aŋ がある。助動詞の -aŋ はかならずしも目的語を必要とする動詞とのみむすびつづくわけではない。助動詞の -aŋ はボド・ガロ (Bodo-Garo) 系のガロ語 (Garo) で去辞をあらわす -aŋ と関連し、格標識の =aŋ はタニ (Tani) 系のガロ語 (Galo) で目的格をあらわす =aam (Post 2007: 721) と関連しているとおもわれる。すなわち、両者は来源がことなる。

わる形式をもつものがある。(8)にしめす *-laŋ* は「いく」とおなじ形式であり、助動詞としてもちいられて典型的には過去の出来事をあらわす<sup>12</sup>。(9)にしめす *-kəlaŋ* は、*laŋ* に完了性をしめす接頭辞 *kə-*<sup>13</sup> が付加したものである。

(8) *wai?* *-kó?*, *kai?* ***-laŋ*** *-náin* =*gə*<sup>14</sup> =*hú?*  
 嘘をつく *-SEQ* 逃げる *-PAST* *-PPRD* =*NOM* =*SPRD*  
 「嘘をついて逃げていってしまったのです。」

(9) *byáin* *páin* ***-kəlaŋ*** *-náin*.  
 アオサギ 飛ぶ *-PERF.ANDT* *-PPRD*  
 「アオサギは飛んでいってしまった。」

完了性をあらわす接頭辞 *kə-* は、来辞 *-ain* に付加して、全体として *-kəain* という助動詞をつくる (10)。しかし、去辞の *-a* や、移動に無関係の *-aŋ* には付加しない。

(10) *ŋa* =*gá* *tain**du* *suŋ* ***-kəain*** *-náin*.  
 1.SG =*GEN* おはなし 終わる *-PERF.VEN* *-PPRD*  
 「わたしのおはなしはもうおわってきました (おわりました)。』

*-ain* とはことなるもうひとつの来辞として、使用頻度はひくいけれども、*-va* という助動詞があり、やはり *-náin* とともにもちいられうる (11)。

(11) *bofó* *ŋá* =*he?* =*ká* *lú* *thu?* ***-va*** *-náin*.  
 人名 QUOT.言 =*DPRD* =*NOM* 人 到 *-VEN* *-PPRD*  
 「ボーショーという男がすでにたどりついた。」

ほか、*-náin* が必要とする助動詞として確認されているものが三種類ある。ひとつは動詞としては「居る」という意味をもち、助動詞としては継続相をあらわす *-túŋ* (12) である。もうひとつは、動詞としては「置く」という意味をもち、助動詞としてもちいられる *-padá?* (13) である<sup>15</sup>。最後に、助動詞としてのみもちいられ、発話時において現場からたちさっていることをしめす *-dá?* (14) である。

(12) *amí?**máin* *-ya?* *bó* *kəphrín* ***-túŋ*** *-náin*.  
 目・顔 *-PL* ひどく 腫れる *-CONT* *-PPRD*  
 「目も顔もすでにひどく腫れあがってしまっている。」

<sup>12</sup> 助動詞としての *-laŋ* は、未来完了をあらわす文でももちいられる。だから、かならずしも過去の出来事ばかりをあらわすわけではない。ただし、典型的には過去をあらわすので、語釈としては *-PAST* としている。岡野(2003: 333)は、ビルマ語の「いく」が移動をあらわさないばあいについて、「話し手の期待する状態変化の範囲を通り越してしまうこと」を意味するのではないかとのべている。チャック語の *-laŋ* についても、同様の傾向があるとかんがえられる。

<sup>13</sup> チャック語と系統的に比較的ちかい関係にあるジンポー語においては、接頭辞 *ga[ka]-* がより生産的にもちいられる。Maran & Clifton (1976: 449) によれば、接頭辞 *ga-* は「直接的行為をあらわす」という。チャック語の *kə-* にもそのような意味あいがあるかもしれない。

<sup>14</sup> 名詞化をあらわす *=gá/ká* は、述部標識のまえで弱化して *=gə/ka* で実現する。

<sup>15</sup> *padá?* という形式は、もともとは単独で「置く」という意味をもつ *pí* という動詞に、助動詞の *-dá?* が付加した形式であると推定される。

- (13) aŋ =ŋaŋ rétú? -ra? sa -pədá? -náinj.  
 稲 =OBJ オウム -PL 食べる -置き去る -PPRD  
 「稲はオウムたちがすでに食べていってしまいました。」
- (14) tú =á? -ta kyaiŋ -gó? ŋa -dá? -náinj.  
 ことば =CL:ことば - 残る -SEQ 存る -立ち去る -PPRD  
 「ひとつ言い残してしまいました。」

(8) から (14) にしめた例は、**太字**でしめた助動詞をいわずに、すべて非文となる。非文になる理由はわからないけれども、チャック語の完了文においては、アスペクトや移動にかかわる助動詞をかならずしめす必要がある、ということはいえる<sup>16,17</sup>。

以上の事実からは、「いく」laŋ や「くる」vaiŋ をふくむ文は、それ自体がすでに移動動詞であるから、さらに助動詞をいう必要がないとおもわれるかもしれない。しかし、移動動詞であっても助動詞は必要である。たとえば (8) の「逃げる」kai?, (9) の「飛ぶ」paŋ, (11) の「到着する」thu? といった動詞は、それ自体が移動動詞であるけれども<sup>18</sup>、それぞれに後続している助動詞をいわずに、非文となる。

### 3.3. 命令文における助動詞の分布

命令文においても、「いく」laŋ と「くる」vaiŋ は完了文のばあいとほぼおなじようなふるまいをみせる。すなわち、(15) と (16) にしめすように、両者ともに助

<sup>16</sup> チベット・ビルマ諸語においては、動作の方向をあらわす形式がアスペクトや時制をあらわすようになるという現象が Wolfenden (1929: 56-64) に報告されている。その後の記述的研究では、ビルマからタイにかけてはなされるロロ・ビルマ系のラフ語 (Matisoff 1982<sup>2</sup>: 320) や、中国・四川省の川西走廊諸語であるギャロン語 (長野 1984: 13) やチアン語 (LaPolla & Huang 2003: 164), あるいはインド・マニプール州ではなされるメイティ語に類似した特徴があることが報告されている (Chelliah 1997: 226)。これらの形式の使用が義務的かどうかまで記述したものとしては白井 (2006: 47) があり、川西走廊諸語のダバ語では、過去であることをあらわすために方向をあらわす接頭辞が基本的に必要であるという。

<sup>17</sup> ただし、次例にしめすように、否定文においては、移動にかかわる助動詞があらわれなくともよい。

(i) apf? =a áyo?ka ará á- ŋa -náinj.  
 腹 =LOC さらに 場所 NEG- 存る -PPRD  
 「おなかにもう場所がない。」

<sup>18</sup> 「逃げる」や「飛ぶ」、「到着する」といった動詞は、移動方向についての指定がないという点で、典型的な移動動詞ではなく、チャック語において移動動詞としてあつかわれていないのではないかと、という趣旨の指摘を査読者のひとりからうけた。そういう可能性はたしかにある。ただし、上から下への移動をあらわす「落ちる」hrai? という動詞について、助動詞が必要となる例が、次例にしめすように確認されている。だから、移動動詞であっても、-náinj を述部標識とする文においては、ほかになんらかの助動詞が必要であることにはかわりはない、とかがえられる。

(i) iŋmá lú dofá hrai? -túŋ -náinj.  
 それ 人 危険 落ちる -CONT -PPRD  
 「その人はすでに危険におちてしまっている。」

動詞をとまわず、単独で命令文をつくることができる。

- (15) naŋ məró? =phá? =ní =ya nara laŋ.  
 2.SG 北 =側 =こちら =LOC すこし GO  
 「あなたは北のほうへすこしいきなさい。」
- (16) vaiŋ, niŋya? sú -wa cu?ti ri =gá =ma?  
 COME 1.PL CL:もの -1 条約 する =NOM =SUBJ  
 「こい、俺たちはひとつとりきめをしよう。」

しかし、ほかの動詞については、かならず助動詞をいう必要がある。確認されているかぎりでは、命令文にもちいられる助動詞はすべて移動にかかわる助動詞である。(17) から (21) に命令文をつくりうる助動詞すべての例をあげる。

- (17) ha? -ta súŋ -go? yu -wa.  
 CL:回 -1 探す -SEQ 見る -ANDT  
 「一度さがしてみなさい。」
- (18) ŋa =ji? áfe -yaiŋ.  
 1.SG =ために 売る -BEN.VEN  
 「わたしにうりなさい。」
- (19) la -kóaiŋ.  
 とる -PERF.VEN  
 「とってきなさい。」
- (20) la -kólaŋ.  
 とる -PERF.ANDT  
 「とっていきなさい。」
- (21) kvú -va.  
 助 -VEN  
 「助けにきなさい。」

(17) から (21) にあげた助動詞をみると、移動に無関係の -aŋ がいないことに気づく。-aŋ は移動そのものをあらわしているわけではないのであらわれていない、とおもわれるかもしれない。しかし、筆者の観察では、(4c) でしめたような、命令文であることをしめすもっとも一般的な標識である -áiŋ が、助動詞としての -aŋ と関係がある。

そのようにかんがえる根拠はふたつある。ひとつは、助動詞の -aŋ と命令文の -áiŋ は相補分布しているという事実である。用例を観察するかぎりでは、助動詞の -aŋ は完了文で -náaiŋ とともにしかあらわれない<sup>19</sup>。そして命令文標識の -áiŋ は、命令文でしかあらわれない。もうひとつの根拠は、命令文では助動詞があらわれるの

<sup>19</sup> この点についてよりくわしくは注 11 を参照。

が通則であるにもかかわらず、(4c) にしめたように、 $-\acute{a}\eta$  をもちいた命令文には、そのような制約はないという事実である。 $-\acute{a}\eta$  をもちいたときに助動詞があらわれなくてよいのは、 $-\acute{a}\eta$  そのものが、本来は助動詞である  $-a\eta$  に由来するからとかがえられる。助動詞の  $-a\eta$  と命令文標識の  $-\acute{a}\eta$  は声調がことなる。しかし、命令文では特別な音調がかぶさるために、声調がことなってきたきこえているだけであるかもしれない。

傍証としては、命令文であることをしめすほかの標識についてはやはり助動詞が必要であるけれども、 $-\acute{a}\eta$  があらわれていれば、助動詞がなくてもよいという事実もあげることができる。たとえば、動作の開始をうながす命令文標識である  $=dái?$  は、(22) にしめすように助動詞を必要とするけれども、(23) にしめすように  $-\acute{a}\eta$  があれば、助動詞を必要とはしない。

(22)  $ahá =\eta \quad phwá\eta \quad -\eta a\eta \quad =dái?$   
 扉 =OBJ 開ける -BEN.VEN =IMP  
 「扉をあけなさい。」

(23)  $na\eta =gá \quad ása \quad =\eta yu \quad -wá\eta \quad =dái?$   
 2.SG =GEN 息子 =OBJ 見る -IMP =IMP  
 「あなたの息子をみなさい。」

### 3.4. 「いく」 $la\eta$ と「くる」 $va\eta$ の形態論的分析

チャック語においては、完了文や命令文で移動動詞に代表される助動詞をもちいなければならないことを、これまでに確認した。そして、「いく」  $la\eta$  と「くる」  $va\eta$  だけが、通則にはずれていることをみた。この節では、「いく」  $la\eta$  と「くる」  $va\eta$  も通則にしたがっているという仮説をたて、検証をおこなう。

#### 3.4.1. 仮説

「いく」  $la\eta$  と「くる」  $va\eta$  を分析するさいに鍵となるのは、(7) でしめた助動詞  $-a$ ,  $-ai\eta$ ,  $-a\eta$  である。この三つの助動詞には、ほかの助動詞とはことなる特徴がある。それは、先行する動詞の末尾音にあわせて、わたり音があらわれたり、直前の母音と融合したりするということである。表3にそれぞれの異形態とそれらがあらわれる環境をしめす。

表3 助動詞  $-a$ ,  $-ai\eta$ ,  $-a\eta$  の連声

	$-a$	$-ai\eta$	$-a\eta$
i, e, i\eta, ai\eta のあと	$-ya$	$-ya\eta$	$-ya\eta$
u, o のあと	$-wa$	$-wa\eta$	$-wa\eta$
$\eta$ のあと (ただし $i\eta$ , $ai\eta$ はのぞく)	$-\eta a$	$-\eta a\eta$	$-\eta a\eta$
i, tu, ? のあと	$-a$	$-ai\eta$	$-a\eta$
a のあと	$-\emptyset$	$-i\eta$	$-\eta$

注目すべきは、動詞が母音 -a でおわる環境である。表3ではそれぞれの助動詞の実現形式を便宜的に -∅, -in, -ŋ と表記したけれども、これは先行する動詞の母音 -a と融合しているということである。

この規則を考慮すると、チャック語の「いく」laŋと「くる」vaiŋも、本来はべつの動詞に助動詞が融合したものであるとかがえることができる。(24)に仮説をしめす。

- (24) a. 「いく」laŋ は la という動詞に助動詞 -aŋ がついた形式である。  
 b. 「くる」vaiŋ は va という動詞に助動詞 -aiŋ がついた形式である。

### 3.4.2. 問題点

(24)にあげた仮説には、問題点がふたつある。ひとつは、動詞の意味や用法の問題である。もうひとつは、ほかの助動詞との共起関係である。

#### 3.4.2.1. 「いく」laŋ の形態論的分析の問題点

「いく」laŋ を動詞 la に助動詞 -aŋ がついたものであると分析する問題点をのべる。

ひとつは、チャック語において la という形式は、(25)にしめすように、動詞としては「とる」という意味であるという点である。

- (25) áma lú -waʔ =théʔ =káŋ káŋtháŋ la =heʔ =láíʔ.  
 3.sg 人 -PL =そば =から 情報 とる =DPRD =HS  
 「彼はひとびとから情報を入手したそうです。」

ただし、チャック語の助動詞のなかには、用例がきわめてすくないけれども、-la というものがある。助動詞としての -la は、用例をみるかぎりでは、「いく」という意味をもつ。

- (26) lú -svu =waŋ la -la =dáiʔ.  
 人間 -FEM =OBJ とる -LA =IMP  
 「人間のおんなをとりにいけ。」

助動詞としての -la は、「とる」la に後続する例しか確認されず、ほかの助動詞と共起する例も確認されない。-la が助動詞であることは、命令文標識 =dáiʔ に先行していることからわかる。すなわち、3.3 ですでのべたように、命令文においては原則として移動をあらわす助動詞をもちいる必要がある。だから -la を移動をあらわす助動詞とかがえることができる。

以上のべてきたように、チャック語において la という形式は、動詞としては「とる」という意味であり、「いく」という意味がない。助動詞としては「いく」という意味があるけれども、用例が限定的である。「いく」laŋ を la と -aŋ の融合形式とかがえるとしても、両者の融合がおこったのは、la が単独で「いく」という意味

でもちいられていたときであるとかんがえなければならない。

もうひとつの問題は、「いく」*laŋ*のあとに、助動詞としての *-laŋ* や、来辞の *-aiŋ* が後続する用法があるということである。(27) と (28) に用例をしめす。

- (27) *naŋ maŋ =gá kíŋ =ya laŋ -laŋ =he?*  
 2.SG 王 =GEN 家 =LOC GO -PAST =DPRD  
 「お前は王の家に行った。」
- (28) *ŋa kai? -laŋ -ŋaiŋ -náŋ =gə =hú?*  
 1.SG 逃げる -PAST -BEN.VEN -PPRD =NOM =SPRD  
 「わたしは逃げてきたところなのです。」

(27) や (28) の例がなぜ問題であるかという点、動詞句のなかで助動詞がどういふ順番であられるか、どの助動詞と共起できないか、といったことがおおよそきまっているからである。(7) にしめた去辞 *-a*、来辞 *-aiŋ* は、意味的にかんがえて共起することがない。共時的にみれば移動にかかわらない *-aŋ* についても、去辞や来辞とは共起しない<sup>20</sup>。もしも「いく」*laŋ* を *la* と *-aŋ* との融合形式であるとかんがえると、助動詞 *-aŋ* が一度あらわれたあとで、おなじ助動詞をふくむとかんがえられる *-laŋ* や、*-aŋ* とは共起できない助動詞 *-aiŋ* があらわれることになってしまう。したがって、「いく」*laŋ* がももとは *la* に *-aŋ* がついた形式であるとしても、共時的にはすでに語彙化しているとかんがえなければならない。

### 3.4.2.2. 「くる」*vaiŋ* の形態論的分析の問題点

「くる」*vaiŋ* についても、「いく」*laŋ* とほとんどおなじ問題点が存在する。すなわち、チャック語においては *va* という形式の動詞はない。(11) に例をしめたように、助動詞として来辞の機能をもつ *-va* があるのみである。「くる」*vaiŋ* を *va* と *-aiŋ* の融合形式とかんがえるとしても、両者の融合がおこったのは *va* が単独で「くる」という意味でもちいられていたときであるとかんがえなければならない。

また、「くる」*vaiŋ* についても、(29) にしめすように、来辞の *-aiŋ* と共起するという問題がある。

- (29) *múnyán + thín + búləlŋ =ta -ra vaiŋ -yaiŋ =gá.*  
 ワニ + 黒い+大きい =CL:動物 - COME -BEN.VEN =FUT  
 「黒い大きいワニ一匹がやってくるだろう。」

「くる」*vaiŋ* を *va* と *-aiŋ* との融合形式であるとかんがえるならば、(29) の例は、一度 *-aiŋ* をもちいたあとで、もう一度 *-aiŋ* をもちいていることになり、不合理である。したがって、「くる」*vaiŋ* がももとは *va* に *-aiŋ* がついた形式であるとしても、

<sup>20</sup> 去辞 *-a*、来辞 *-aiŋ*、そして *-aŋ* が共起しないという事実は、4.4.2 で後述するように、これらが通時的には人称標示に由来することをしめす傍証であるかもしれない。

共時的にはすでに語彙化しているとかんがえなければならない。

### 3.5. 共時的分析のまとめ

以上、本節ではチャック語の「いく」laŋと「くる」vaiŋを共時的に分析した。その結果、(30)にしめすことがわかった。

- (30) a. チャック語の「いく」laŋは、laに助動詞-aŋがついた形式と分析できる。ただし、共時的にはlaが「いく」という意味で単独でもちいられることがない。共時的にはlaŋという形式で一語となっている。
- b. チャック語の「くる」vaiŋは、vaに助動詞-aiŋがついた形式と分析できる。ただし、共時的にはvaが「くる」という意味で単独でもちいられることがない。共時的にはvaiŋという形式で一語となっている。
- c. 「いく」laŋ, 「くる」vaiŋいずれの形式も、共時的には被覆形式である助動詞が、露出形式として生産的にもちいられていた時代に成立した形式であると推定される。

## 4. 通時的分析

共時的分析の結果、問題点のはのこるものの、「いく」laŋはla + -aŋ, 「くる」はva + -aiŋに由来するという結論がえられた。

本節では、共時的分析からえられた結果の妥当性を、ほかのチベット・ビルマ諸語と比較することによって検証する。

### 4.1. チベット・ビルマ語派ルイ語群における「いく」と「くる」

表1にしめしたように、チベット・ビルマ祖語の「いく」と「くる」にはさまざまな形式がある。チャック語が属するチベット・ビルマ語派ルイ語群の言語では、「いく」と「くる」をあらわす形式は、表4のようにになっている。

表4 ルイ語群の「いく」と「くる」

言語名	地域	いく	くる	典拠
アンドロ語	インド・マニプール州	sa	lee	McCulloch (1859)
センマイ語	インド・マニプール州	sa	lee	McCulloch (1859)
カドゥー語	ビルマ・ザガイン管区	naŋ	li	筆者の一次資料
ガナン語	ビルマ・ザガイン管区	naŋ	li	筆者の一次資料
チャック語	バングラデシュ・チッタゴン丘陵	laŋ	vaiŋ	筆者の一次資料

アンドロ語やセンマイ語は、現在ではすでに話者がいないと推定される言語である。「いく」saはジンポー語の「いく・くる」sa<sup>33</sup>(徐(他編)1983:702)とおなじ形式であり、PTB \*s-waと関係している。「くる」leeはラテン文字表記の習慣か

ら判断して実際には [li] であると推定され、カドゥー語やガナン語の形式とともに PTB \*la-y とかかわる。

カドゥー語やガナン語の naŋ とチャック語の laŋ は同源形式にみえるかもしれない。通言語的にみても、l- と n- の交替はよくみられるからである。しかし、表5にしめすように、両言語ともに l- は l- で、n- は n- で対応するのが通則である。ビルマ文語と比較して例外的な対応をしめす「月」は、チベット・ビルマ諸語のなかで l- と t/d- の交替がみられる一連の単語のなかのひとつであり (Matisoff 2006)、ルイ語群を特徴づける形式のひとつといえる。カドゥー語とガナン語の形式はチャック語とは来源がことなり、ビルマ文語の「追い出す」hnang に対応する。

表5 ルイ語群とビルマ文語における l- と n- の対応例

	いく	あなた	得る	耳	月
チャック語	laŋ	naŋ	lu	akəná	sədá
カドゥー語	naŋ	naŋ	lu	kəná	shə́tá
ガナン語	naŋ	naŋ	lu	kəná	shə́tá
ビルマ文語	hnang(追い出す)	nang	lu <sup>3</sup> (奪う)	naa <sup>2</sup>	la <sup>3</sup>

このように、チャック語の形式は「いく」laŋ にしても「くる」vaŋ にしても、チャック語が属するルイ語群では同源形式がみられない。以下、「いく」laŋ と「くる」vaŋ の来源を、ほかのチベット・ビルマ諸語を視野にいれて、考察する。

#### 4.2. 「いく」と「とる」の関連性

まずチャック語「いく」laŋ の来源から考察する。共時的にみればチャック語の「いく」laŋ は la + -aŋ と分析できるけれども、la の意味が「とる」である点に問題がのこることはすでにのべた。そして、「いく」laŋ に対応する形式がほかのルイ語群にはみられないことを前節でみた。

Benedict (1972) や Matisoff (2003) には「とる」にあたる形式として la と対応する語形は再構されていない。しかし、「とる」が la と類似した形式をもつ言語は、ほかのルイ語群の言語にみられるだけでなく、東北インドからビルマ、中国・雲南省にかけて分布している。そして、それらとちかい関係にある言語のなかには「はこぶ」あるいは「もつ」という意味で対応しているものも散見される。表6に、「とる」la とかかわりある形式をもつチベット・ビルマ諸語の例をあげる。さらにおおくの例は、Sun (1993: 321), VanBik (2006: 264), Joseph & Burling (2006: 143) なども参照。

表6 チベット・ビルマ諸語の「とる」・「はこぶ」

意味	言語名	系統	語形	典拠
とる	チャック語	ルイ語群	la	筆者の一次資料
とる	カドゥー語	ルイ語群	la	筆者の一次資料
とる	ガナン語	ルイ語群	la	筆者の一次資料
とる	アンドロ語	ルイ語群	la-ha	McCulloch (1859)
とる	センマイ語	ルイ語群	la	McCulloch (1859)
とる	ジンポー語	ジンポー・ヌン語支	la <sup>55</sup>	徐 (他編) (1983: 386)
はこぶ	トゥルン語	ジンポー・ヌン語支	laŋ	LaPolla (2003: 681)
とる	レブチャ語	所属語支未確定	lúng	Plaisier (2007: 236)
とる	メイテイ語	所属語支未確定	lów	Chelliah (1997: 343)
とる	タニ祖語	タニ諸語	*laŋ	Sun (1993: 321)
とる	ボド・ガロ祖語	ボド・ガロ語支	*la <sup>2</sup> -	Joseph & Burling (2006: 143)
とる	クキ・チン祖語	チン語支	*laa-I, *laak-II <sup>21</sup>	VanBik (2006: 264)
はこぶ	チノ語	ロロ・ビルマ語支	la <sup>44</sup>	林 (2007: 附録 #269)

表6からは、「とる」にたいしてPTB \*laを再構しうる。ここで、タニ諸語やトゥルン語においてlaŋという形式があらわれていることに注目される。Sun (1993)においては\*laŋという語形はそれ以上は分析されていない。しかし、この形式はさらに\*\*la-ŋ < \*\*la-aŋというように分析できるのではないだろうか。そのようにかんがえるてがかりとなるのは、ボド・ガロ語支のガロ語とラバ語、ティワ語である。Joseph & Burling (2006)は、これらの三言語で、移動をあらわす助動詞が分析的なものから融合し、語彙化しているようすを表7のようにしめている。

表7 Garo, Rabha, and Tiwa Verbs and Affixes (Joseph & Burling 2006: 45)

	Garo	Rabha	Tiwa
'go away'	reʔ-aŋ-	réŋ-	lí-
'come'	reʔ-ba-	rí-ba-	phí-
'take away'	raʔ-aŋ-	rán-	lán-
'bring'	raʔ-ba-	rá-ba-	láp-

表7からは、ガロ語には去辞として-aŋ、来辞として-baがあるとわかる。ガロ語の去辞-aŋは、チャック語の-aŋにつうじる形式であると推定される。

Joseph & Burling (2006)によれば、ガロ語においては去辞-aŋも来辞-baも生産的にもちいられる。他方、ラバ語においては-baは部分的には生産的にもちいられるけれども、-aŋはもはや生産的にもちいられない。ティワ語にいたっては、-aŋ

<sup>21</sup> チン語支の言語においては、動詞に二種類の語幹があることがおおい。それぞれ第一語幹 (stem-I)、第二語幹 (stem-II) として区別される。

も -ba も動詞の一部として語彙化してしまっている。

おなじことがタニ諸語におこった可能性がある。すなわち、タニ祖語では「いく」にたいして \*in が再構されているけれども (Sun 1993: 179), ガロ語の去辞 -aŋ あるいはチャック語の -aŋ につづる形式がべつにあったかもしれない。その根拠は、「とる」\*laŋ (Sun 1993: 186, 321) や「くる」\*waŋ (Sun 1993: 103, 332) の語末にみられる \*-ŋ である。「とる」については、PTB \*la が再構できることをすでにみた。「くる」についても DeLancey (1980) や Matisoff (2003) に PTB \*wa/\*s-wa として再構される形式が関係しているとかんがえられる。これらの語根に、ガロ語の -aŋ やチャック語の -aŋ と関係する形式として、\*\*-aŋ という形態素が付加している可能性がある<sup>22</sup>。

このようにかんがえることによって、表 6 において、一見不規則にみえる形式についても、説明をあたえられる。たとえばレブチャ語の「とる」は lúŋ < \*\*la-waŋ < \*\*la-wa-ŋ < \*\*la-wa-aŋ のように再構しうる。平行的な現象が、チノ語にもおこっていた可能性がある。チノ語の「とる」は共時的には la<sup>44</sup> である。しかし、チノ語の -a は口口・ビルマ祖語では \*-ak にさかのぼりうる (林 2003)。だから、通時的には \*\*lak という形式が推定されうる。\*\*lak という形式は、\*\*la-k < \*\*la-ga と分析することができる。すなわち、チノ語の「とる」la<sup>44</sup> は、PTB \*la 「とる」に「いく」をあらわす PTB \*ga (DeLancey 1980: 265) が付加して語彙化した形式であるとかんがえられる。

チャック語の laŋ についても、通時的に laŋ < \*\*la-aŋ と分析することができる。そのさい、la の意味が「とる」であるのか、(26) でしめした助動詞としての「いく」であるのかが問題にみえるかもしれない。表 6 にしめしたように、ルイ語群の諸言語と比較すれば、la の意味は「とる」である。他方、ビルマ語アラカン方言や、ビルマ語アラカン方言の変種とみられるマルマ語においては、高声調の lá が「いく」という意味をもっている。チャック語における助動詞としての「いく」-la は、ビルマ語アラカン方言やマルマ語に通じる形式であると推定される<sup>23</sup>。

ここで、表 6 にあげた言語においては、「いく」や「くる」にあたる形式について、PTB \*la-y とはことなる語根がもちいられる例が散見される点が注目される。表 8 に、具体的にしめす。

<sup>22</sup> DeLancey (1980: 250 注 18) は、ガロ語の去辞 -aŋ には言及していないものの、PTB \*wa 「いく」と PTB \*wang 「くる」が最終的にはおなじ形式にさかのぼることはほとんどうたがいがええない、とのべている。

<sup>23</sup> 査読者のひとりからの指摘によると、ビルマ語アラカン方言の lá は、古ビルマ語の la<sup>2</sup> 「いく」とかかわりがある。この形式は、ビルマ系諸語 (Burmish languages) にも同源形式がひろく分布している。ビルマ語とビルマ系諸語を比較した Nishi (1999: 105) は、ビルマ語 la<sup>2</sup> は \*lafí あるいは \*laf? にさかのぼるのではないかと推定している。

表8 PTB \*la「とる」をもつ言語の「いく」・「くる」

言語名	いく	くる	典拠
チャック語	lanj	vainj	筆者の一次資料
カドゥー語	nanj	li	筆者の一次資料
ガナン語	nanj	li	筆者の一次資料
アンドロ語	sa	lee	McCulloch (1859)
センマイ語	sa	lee	McCulloch (1859)
ジンポー語	sa <sup>33</sup>	sa <sup>33</sup>	徐 (他編) (1983: 702)
トゥルン語	-ji	-rà	LaPolla (2003: 679)
レプチャ語	nóng	di ~ dít	Plaisier (2007: 227, 225)
メイテイ語	čót	lak	Chelliah (1997: 324, 343)
タニ祖語	*in	*vaj	Sun (1993: 179, 332)
ボド・ガロ祖語	—	*Ri <sup>2</sup> -ba	Joseph & Burling (2006: 121)
クキ・チン祖語	*paay, *kal	*huŋ	VanBik (2006: 89, 112, 195)
チノ語	le <sup>55</sup> , je <sup>55</sup> , ja <sup>55</sup>	lɔ <sup>42</sup> , lut <sup>55</sup> , la <sup>55</sup>	林 (2007: 附録 #202, #203)

表8からは、PTB \*la-y と関係した形式がみられるのは、カドゥー語、ガナン語、アンドロ語、センマイ語といったルイ語群の諸言語、ボド・ガロ祖語<sup>24</sup>、チノ語である。これらの言語については、チノ語をのぞいては、PTB \*la-y > \*li という変化が推定される。他方、表8からは、ジンポー語、トゥルン語、レプチャ語、メイテイ語、タニ祖語、クキ・チン祖語において、「いく」や「くる」にかかわる形式は、PTB \*la-y とは無関係であることがわかる。ところで、PTB \*la-y は、\*la + \*-y と分析できる。そして、Matisoff (2003: 482) によれば、\*-y はチベット・ビルマ祖語における去辞 \*ray の縮約形式である。Matisoff (2003) は「とる」の祖形としてPTB \*la をたてないけれども、PTB \*la-y にみられる \*la は、「とる」の \*la と関係しているのではないかとおもわれる。つまり、「いく・くる」と「とる」は、本来的には同一語根から派生してきた可能性がある。

以上より、表6や表8にしめした諸言語においては、もともとはPTB \*la があったとみることができる。そして、ある言語ではPTB \*ray が付加した \*la-y という形式となり、それが「いく」や「くる」という意味でうけつがれ、ある言語では \*la のままで「いく」や「くる」という意味であったり、「とる」という意味でうけつがれているとみることができる。

チャック語においては、PTB \*la が、動詞としては「とる」、助動詞としては「いく」という意味でひきつがれているとかがえられる。「いく」という動詞になった lanj については、「いく」という意味の助動詞 -la に -anj が付加したとかがえるのがわかりやすい<sup>25</sup>。

<sup>24</sup> ボド・ガロ祖語で \*Ri- と再構されているのは、\*li- であるか \*ri- であるかを決定する根拠がないからである。ただし、PTB の形式を考慮すれば、おそらくは \*li- と再構することができる。  
<sup>25</sup> PTB \*la から「とる」と「いく・くる」の両者が派生しているとかんがえられる言語にはチ

## 4.3. 「くる」の来源

vaiŋ < va + -aiŋ であることは、共時的分析からすでにあきらかとなった。さらに通時的に言えば、va という形式はビルマ文語の swaa<sup>2</sup> 「いく」<sup>26</sup>に通じる形式であることは、表1からもわかる。ビルマ文語の w- がチャック語では v- で対応する平行例とともに、表9にあらためてしめしておく<sup>27</sup>。

表9 チベット・ビルマ諸語の「いく」と \*w-

	チャック語	ビルマ文語	マルマ語	ジンポー語	カドゥー語
いく	va (来辞)	swaa <sup>2</sup>	θwá <sup>28</sup>	wa <sup>31</sup>	naŋ
齒	asəvá	swaa <sup>2</sup>	θwá	wa <sup>33</sup>	shəwá
豚	vaʔ	wak	wɔʔ	waʔ <sup>31</sup>	waʔ

チャック語の vaiŋ はビルマ文語の wang 「入る」と同源ではないかとおもわれるかもしれない。たしかに、表9にしめたように、頭子音については v- と w- で対応している。しかし、幹母音と末子音については、対応していない。ビルマ文語の -ang に対応するチャック語の形式は -aŋ である。またチャック語の -aiŋ に対応するビルマ文語の形式は一般的には -an である。借用語ではないかとおもわれる対応例を、表10にあげておいた。

ノ語もある。チノ語の「はこぶ」は、すでにのべたように la<sup>44</sup> であり、ロロ・ビルマ祖語 \*lak にさかのぼりうる。他方、チノ語には動詞連続構造の後部要素にのみあらわれる形式として「くる」という意味をもつ la<sup>55</sup> もある (林 2007: 附録 #203)。この形式は PTB \*la にさかのぼると推定される。ただし、チノ語の -a はロロ・ビルマ祖語 \*-ak に由来することがおおいので、不規則な対応であるとはいえる。

<sup>26</sup> 西田 (1994: 10) によると、ビルマ文語 swaa<sup>2</sup> < \*s-wa であり、この \*s- はチベット・ビルマ祖語において過去をあらわす標識であったという。

<sup>27</sup> Löffler (1964: 97) はチャック語の vaiŋ にたいして「サック祖語 (proto-Sakisch)」として \*walʔ という形式をあげる。Löffler (1964: 103) でしめされるように、「火」を意味するチャック語もまた vaiŋ である。これにはガロ語 (Garo) の wal が対応する。だから、「火」をあらわすサック祖語として \*wal がたてられている。他方、Löffler (1964: 102-103) では「あたえる」にたいして yaing という形式があげられている。そして、サック祖語として \*yan という形式があげられている。しかし、チャック語で「あたえる」は i である。Löffler があげる yaing は i に来辞の -aiŋ がついた形式である。これは、すでに筆者が分析した vaiŋ 「くる」 < va + -aiŋ と平行関係にある。vaing にたいしては \*wal, yaing にたいしては \*yan を再構するというのは、チャック語動詞の内部構造からかんがえて不合理である。

なお、「火」にたいしては PTB \*b-war ≧ \*p-war (Matisoff 2003: 428) が再構されている。チャック語によりちかい形式をしめすものは三言語確認されている。ひとつはジンポー語で wan<sup>31</sup> であり、もうひとつはカドゥー語とガナン語の wan である。

<sup>28</sup> マルマ語の「いく」には lá がふつうにつかわれ、θwá がつかわれることはすくない。

表 10 ビルマ文語 -ang とチャック語の対応

	入る	木	怠惰な	習慣	黄色	喧嘩	池
チャック語	vaiŋ(くる)	aphaŋ	nəpyaŋ	ákyəŋ	waŋ	raiŋ	ígaíŋ <sup>29</sup>
ビルマ文語	wang	a-pang	pyang <sup>2</sup>	a-kyang <sup>3</sup>	wang <sup>2</sup> (輝く)	ran	kan
マルマ語	wɔŋ	əpaŋ	pyáŋ	əkyaŋ	wɔŋ	raiŋ	kaiŋ

このように、通時的観点からみても、チャック語の vaiŋ は va + -aiŋ に由来することを支持する証拠がえられる。

#### 4.4. 問題点

ここまでで、通時的観点からも、チャック語の「いく」 laŋ は \*la + -aŋ, 「くる」 vaiŋ は \*va + -aiŋ にさかのぼるとかんがえられることがわかった。最後にのこされた問題は、移動にかかわると推定される -aŋ や -aiŋ といった助動詞が、どこからきたのかという問題である。

##### 4.4.1. チベット・ビルマ諸語における同源形式

表7にしめしたように、ガロ語の去辞である -aŋ が、チャック語の -aŋ と関係している形式であると推定される。類似した形式は、たとえばチン語支に属するミゾ語で未来をあらわす標識であり、勧誘法にももちいられる -áŋ (Chhangte 1993: 108, 114) などにもみられる。

ところが、管見のかぎりでは、チャック語の助動詞 -aiŋ や -a については、ほかのチベット・ビルマ諸語で対応するとおもわれる形式をみいだせない<sup>30</sup>。

##### 4.4.2. 人称標示と方向接辞

表9の「齒」、および表10からわかるように、チャック語とビルマ文語の形式を比較すると、表11のような対応関係がある。さらに、ビルマ文語の韻母の形式は、一般的にはチベット・ビルマ祖語での形式を反映しているとかんがえられる。だから、チャック語とビルマ文語の韻母の対応は、チャック語とチベット・ビルマ祖語の韻母の対応とかんがえてよい。

<sup>29</sup> ígaíŋ < í「水」 + \*kaiŋ とおもわれる。ただしチャック語で \*kaiŋ が単独でつかわれて「池」に類する意味をもつことはない。

<sup>30</sup> チャック語とおなじくルイ語群に属するカドゥー語とガナン語については、ほぼ同様の助動詞が存在することが、筆者による予備的な調査からわかっている。それらの助動詞は、ただ機能が類似しているというだけでなく、表3でしめしたような連声をおこすところまで、よくにている。連声をこぐむるこの種の助動詞の存在が、ルイ語群の特徴のひとつといえる。

なお、チン語支に属するダイ・チン語における命令文標識 =a (So-Hartmann 2009: 303) は、あるいはチャック語の去辞 -a と関係があるかもしれない。

表 11 チャック語とビルマ文語の韻母の対応

チャック語	-a	-aiŋ	-aŋ
ビルマ文語	-a	-an	-ang
チベット・ビルマ祖語	*-a	*-an	*-aŋ

表 11 にしめしたチベット・ビルマ祖語の形式が、チャック語の助動詞 -a, -aiŋ, -aŋ にたいして想定される祖形の形式ともなる。

ここで想起されるのは、チベット・ビルマ諸語に散在する動詞の人称接辞である。チベット・ビルマ諸語における人称接辞とは、主語や目的語の人称におうじて、動詞の前後に付加する接辞である。これらの接辞はチベット・ビルマ言語学においては「代名詞化 (pronominalization)」の問題としてしられる。それらの接辞が、各言語において主語などとしてあらわれる人称代名詞の形式と関係があるからである。言語によって、人称接辞があらわれる位置や、人称接辞の形式にこまかいちがいがあある。DeLancey (1980), Thurgood (1985) などを参考にすれば、チベット・ビルマ祖語における人称接辞は、概略としては、表 12 のようにまとめられる<sup>31</sup>。消失することがおおい要素は括弧でくくり、代表的な交替形式は斜線でしめした。

表 12 チベット・ビルマ祖語における動詞の人称標示

一人称	二人称	三人称
*ŋ(a)/k(a)	*n(a)/n(aŋ)	*a(ma)/∅

表 11 と表 12 を比較すれば、音対応から判断すると、チャック語の去辞 -a は三人称 \*a, 来辞 -aiŋ は二人称 \*n<sup>32</sup>, そして -aŋ は一人称 \*ŋ とそれぞれ関係しているといえる。意味的にかんがえても、人称接辞が移動の着点を標示するとかんがえられるかもしれない。すなわち、「くる」は一人称および二人称領域への接近移動とかわることがおおいので、チャック語では二人称領域への接近移動が本来的な意味であったとするなら、それが来辞としてもちいられることも理解しやすい。三人称領域は会話参加者の領域から典型的にははなれているので、そこを着点ととらえれば「いく」という意味になる。一人称接辞と移動方向標示については、起点も着点も一人称領域であるとかんがえれば、移動とは無関係であるようにみえるかもしれ

<sup>31</sup> チベット・ビルマ祖語の段階で代名詞化が存在したかどうかについては、研究者によって意見がわかれ、いまなお議論をよんでいる。ただし、代名詞化が存在する言語については、その言語の歴史におけるある段階において、表 12 にしめすような形式が存在したと推定され、意見の一致をみているとはいえる。なお、代名詞化をめぐる論争については、たとえば Nishi (1995) を参照。

<sup>32</sup> DeLancey (1980: 250 注 20) は、ルシャイ (ミゾ) 語における去辞 ran の語末にみられる -n が、方向接辞の一種ではないかと推測している。ただし、チベット・ビルマ諸語においてほかの語支では類例がみられないともいう。チャック語の来辞として想定されうる -aiŋ < \*-an が、関係する形式であるかもしれない。

ない<sup>33,34</sup>。

チャック語が属するルイ語群については、上位語群としてサル (Sal) 語群 (Burling 1983) あるいはボド・コニャク・ジンポー (Bodo-Konyak-Jingpho) 語支 (Thurgood 2003) がかんがえられている。それらの言語のなかでは、コニャク語やジンポー語に、主語や目的語の人称に応じた動詞の人称標示体系があることが知られている。しかし、ジンポー語の方言であり、インド・アッサム州ではなされるシンポー語 (Singpho) においては、人称標示が存在しない。ガロ語 (Garo) に代表されるボド・ガロ諸語においても、人称標示は存在しない。

チャック語の助動詞 *-a*, *-aiŋ*, *-aŋ* は、主語や目的語の人称にかかわらず、もちいられる。したがって、共時的には人称標示そのものではない。しかし、通時的にみれば、移動の着点として、人称標示にかかわる可能性がある。もしもそのようにかんがえることができるとすれば、人称標示がある言語からない言語へ移行する段階の途中にある言語として、チャック語を位置づけることができる。

#### 4.5. 通時的分析のまとめ

以上、本節ではチャック語の「いく」*laŋ*と「くる」*vaiŋ*を、ほかのチベット・ビルマ諸語を視野にいれて、通時的に分析した。その結果、(31) にしめすことがわかった。

- (31) a. チャック語の「いく」*laŋ* は、通時的にも *la* に助動詞 *-aŋ* がついた形式と分析できる。*la* はチベット・ビルマ諸語で「とる」という意味をもつ \**la* に由来するとかんがえられる。
- b. チャック語の「くる」*vaiŋ* は、通時的にも *va* に助動詞 *-aiŋ* がついた形式と分析できる。*va* はチベット・ビルマ諸語で「いく」や「くる」をあらわす \**wa* に由来するとかんがえられる。

<sup>33</sup> 人称接辞が移動の着点とかかわること、ならびに各人称と移動方向の意味とのかかわりについては、査読者のひとりからの指摘による。

<sup>34</sup> 一人称代名詞については PTB \**ŋa* が再構されている (Matisoff 2003: 487)。ガロ語では語頭に *ŋ-* がたたず、一人称代名詞は *aŋ* となるから (Joseph & Burling 2006: 130)、音対応からすれば、去辞の *-aŋ* も一人称と関係する。他方、チャック語の一人称代名詞は *ŋa* であるから、助動詞としても *-ŋa* という形式が対応するべきとおもわれるかもしれない。実際、チャック語の去辞 *-a* は、表 3 にしめしたように、*-ŋa* であらわれることもある。しかし本稿での主張からすれば、去辞 *-a* は三人称とかかわる形式であるから、一人称とかかわる *-ŋa* が去辞の基本形式とかんがえることはできない。

チベット・ビルマ諸語においては、代名詞の独立形式と人称接辞の形式が一致することはむしろまれである。だから、ガロ語の去辞 *-aŋ* が一人称とかかわり、チャック語の助動詞 *-aŋ* と同源形式であるとしても、一人称代名詞の形式が両言語で一致している必要はない。

ところで、ガロ語の「夢」*dzú-maŋ* は PTB \**r/s-maŋ* に対応する (Matisoff 2003: 325)。この例に代表されるように、ガロ語の *-aŋ* は、一般的には PTB でも \**-aŋ* で対応する。だから、人称接辞と去辞は来源がことなるという見方もある。

人称接辞と移動動詞の関連性については、ガロ語の一人称について可能性があるかもしれないというほかには、同系あるいは周辺の言語に平行例が確認されていない。

- c. 「いく」や「くる」にあらわれる助動詞  $-aŋ$  や  $-aiŋ$  は、去辞の  $-a$  もふくめて、チベット・ビルマ諸語における動詞の人称接辞として  $*_ŋ$  (一人称),  $*_n$  (二人称),  $*_a$  (三人称) と関係している可能性がある。

## 5. おわりに

以上、本稿ではチャック語の「いく」 $laŋ$  と「くる」 $vaiŋ$  の語形成を分析した。その結果、共時的にも通時的にも、「いく」 $laŋ$  は  $la + -aŋ$ , 「くる」 $vaiŋ$  は  $va + -aiŋ$  と分析できることがわかった。いずれの形式も、共時的には被覆形式としてのみあらわれる語形の残滓であるとかんがえられる。

共時的観点からは、チャック語の完了文や命令文においては、移動にかかわる助動詞の使用がほぼ義務的であるという点が、分析の根拠となった。

通時的観点からは、チャック語にみられる去辞や来辞と関係する  $-a$ ,  $-aiŋ$ ,  $-aŋ$  という助動詞が、チベット・ビルマ諸語にみられる動詞の人称標示と関係するという点が、従来にない主張である。

完了文と移動にかかわる表現、あるいは移動にかかわる表現と人称標示の関係がほかのチベット・ビルマ系諸言語、さらには通言語的にどこまでみられるか、今後の研究課題とする。

## 記号・略号一覧

A  $\times$  B A と B は語源的異形態 (allofam); # 非文; - 接辞境界; + 複合語における語境界; = 接語境界; 1 一人称; 2 二人称; 3 三人称; ANDT 去辞; BEN.VEN 利害にかかわる来辞; CL 類別詞; COME 来る; CONT 継続; COP 繫辞; DPRD 動態述部; EMPH 強調; FEM 女性; FUT 未来; GEN 属格; GO 行く; HS 伝聞; IMP 命令; LA 助動詞  $-la$ ; LOC 場所格; NOM 名詞化標識; OBJ 目的格; PERF.ANDT 完了去辞; PERF.VEN 完了来辞; PL 複数; PPRD 完了述部; QUOT 引用; SEQ 継起; SG 単数; SPRD 状態述部; SUBJ 接続法; VEN 来辞; XAN 助動詞  $-aŋ$

## 参考文献

- Benedict, Paul K. (1972) *Sino-Tibetan: a conspectus*. Cambridge: Cambridge University Press.  
 Bernot, Lucien (1966) *Éléments de vocabulaire Cak recueilli dans le Pakistan Oriental*. In: Ba Shin, Jean Boisselier and A. B. Griswold (eds.) *Papers on Asian history, religion, languages, literature, music folklore, and anthropology: essays offered to G. H. Luce by his colleagues and friends in honour of his seventy-fifth birthday, volume 1*, 67–91. Ascona, Switzerland: Artibus Asiæ Publishers.  
 Burling, Robbins (1983) The Sal Languages. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 7(2): 1–32.  
 Chelliah, Shobhana L. (1997) *A grammar of Meithei*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.  
 Chhangte, Lalnunthangi (1993) *Mizo syntax*. Unpublished doctoral dissertation, University of Oregon.  
 DeLancey, Scott Cameron (1980) *Deictic categories in the Tibeto-Burman verb*. Unpublished doctoral dissertation, Indiana University.  
 Gordon, Raymond G. (ed.) (2005) *Ethnologue: languages of the world*. Fifteenth edition. Dallas: SIL International.

- 林範彦 (2003) 「韻母から見たチノ語音韻史」『京都大学言語学研究』22: 347–378.
- 林範彦 (2007) 「チノ語悠楽方言の記述的研究」博士論文. 京都大学.
- Joseph, U. V. and Robbins Burling (2006) *The comparative phonology of the Boro-Garo languages*. Mysore: Central Institute of Indian Languages.
- LaPolla, Randy J. (2003) Dulong. In: Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan languages*, 674–682. London: Routledge.
- LaPolla, Randy J. and Chenglong Huang (2003) *A grammar of Qiang: with annotated text and glossary*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Löffler, Lorenz G. (1964) Chakma und Sak: ethnolinguistische Beiträge zur Geschichte eines Kulturvolkes. *Internationales Archiv für Ethnographie* 50(1): 72–115.
- Luce, G. H. (1985) *Phases of Pre-Pagan Burma: languages and history*. Oxford: Oxford University Press.
- Maggard, Loren, Mridul Sangma and Sayed Ahmad. (2007) *The Chak of Bangladesh: a sociolinguistic study*. Dhaka: SIL Bangladesh.
- Maran, La Raw and John M. Clifton (1976) The causative mechanism in Jinghpaw. In: Shibatani Masayoshi (ed.) *The grammar of causative constructions*, 443–458. New York: Academic Press.
- Matisoff, James A. (1982<sup>2</sup>) *The grammar of Labu*. Second edition. Berkeley: University of California Press.
- Matisoff, James A. (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: system and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. Berkeley: University of California Press.
- Matisoff, James A. (2006) Deltacism of laterals in Sino-Tibetan and elsewhere. Ms. (<http://stedt.berkeley.edu/pdf/JAM/DinguistDilemma-2006.pdf>として入手可能:最終確認2009年1月3日)
- McCulloch, Major W. (1859) *Account of the valley of Munnipore and of the hill tribes: with a comparative vocabulary of the Munnipore and other languages*. Selections from the records of the Government of India (Foreign Department). No. XXVII. Calcutta: Bengal Printing Company Limited.
- 長野泰彦 (1984) 「ギャロン語の方向接辞」『季刊民族学』15(3): 3–70.
- Nishi, Yoshio (1995) A brief survey of the controversy in verb pronominalization in Tibeto-Burman. In: Yoshio Nishi, James A. Matisoff and Yasuhiko Nagano (eds.) *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax*, 1–16. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Nishi, Yoshio (1999) *Four papers on Burmese: toward the history of Burmese (the Myanmar language)*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 西田龍雄 (1994) 「漢藏語族管見」『民博通信』65: 2–25.
- 岡野賢二 (2003) 「現代口語ビルマ語の「行く・来る」」東南アジア諸言語研究会 (編)『東南アジア大陸部諸言語の「行く・来る」』289–336. 東京: 慶應義塾大学言語文化研究所.
- Plaisier, Heleen (2007) *A grammar of Lepcha*. Leiden: Brill.
- Post, Mark William (2007) A grammar of Galo. Unpublished doctoral dissertation, La Trobe University.
- 白井聡子 (2006) 「ダバ語における視点表示システムの研究」博士論文. 京都大学.
- So-Hartmann, Helga (2009) *A descriptive grammar of Daai Chin*. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, University of California.
- Sun, Tianshin Jackson (1993) A historical-comparative study of the Tani (Mirish) branch in Tibeto-Burman. Unpublished doctoral dissertation, University of California at Berkeley.
- Thun Shwe Khaing (1988) 『ラカイン北部地方のサック民族』ヤンゴン: Sit-thi-daw Sa-pe. (原文はビルマ語)
- Thurgood, Graham (1985) Pronouns, verb agreement systems, and the subgrouping of Tibeto-Burman. In: Graham Thurgood, James A. Matisoff and David Bradley (eds.) *Linguistics of the Sino-Tibetan area: the state of the art: papers presented to Paul K. Benedict for his 71st birthday*, 376–400. Canberra: Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, The Australian National University.
- Thurgood, Graham (2003) A subgrouping of the Sino-Tibetan languages: the interaction between language contact, change, and inheritance. In: Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan languages*, 1–21. London: Routledge.
- VanBik, Kenneth (2006) Proto-Kuki-Chin. Unpublished doctoral dissertation, University of California at Berkeley.
- Wolfenden, Stuart N. (1929) *Outlines of Tibeto-Burman linguistic morphology, with special reference to the*

*prefixes, infixes, and suffixes of Classical Tibetan, and the languages of the Kachin, Bodo, Naga, Kuki-Chin, and Burma groups.* London: Royal Asiatic Society.

藪司郎 (1989) 「サック語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』 第2巻:45. 東京:三省堂.

徐悉艷・肖家成・岳相昆・戴慶厦 (編著) (1983) 『景漢辞典』 昆明: 雲南民族出版社.

執筆者連絡先:

[受領日 2009年3月10日]

606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46

最終原稿受理日 2009年9月15日]

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ZXE01631@nifty.com

## Abstract

### ‘Come’ *vaiŋ* and ‘go’ *laŋ* in Cak

KEISUKE HUZIWARA

*Research Fellow, Kyoto University*

Cak is a Luish language belonging to the Tibeto-Burman language family and is spoken in the Chittagong Hill Tracts, Bangladesh. In this paper, I have tried to analyse the internal word structures of *vaiŋ* ‘come’ and *laŋ* ‘go’ in Cak.

As a rule, in Cak, we must employ one of the directional auxiliary verbs in perfective sentences. However, there is no need to do so for the two motion verbs *vaiŋ* ‘come’ and *laŋ* ‘go’. Thus, it is better to reanalyse them as the combination of a verb and a directional auxiliary verb. The investigation clarified that, both synchronically and diachronically, *vaiŋ* is analysable as *va* ‘come/venitive’ + *-aiŋ* ‘venitive’ and *laŋ*, as *la* ‘take/go’ + *-aŋ* ‘non-specific’.

The results also suggested that the three major Cak directives *-a* ‘andative’, *-aiŋ* ‘venitive’, and *-aŋ* ‘non-specific’ might be related to the Proto-Tibeto-Burman pronominal affixes *\*a* ‘third person’, *\*n* ‘second person’, and *\*ŋ* ‘first person’, respectively. If this is the case, we can regard Cak as a language that is in the process of shifting from a pronominalized language to a non-pronominalized one.